

中央ヨーロッパ大学留学報告

—ブダペストでの一年を振り返って—

中央ヨーロッパ大学・歴史学部博士課程在籍 杉山 杏奈

SUGIYAMA Anna

キーワード： ハンガリー、海外留学、留学生交流支援制度

留学先の選択から応募まで

ハンガリーの首都ブダペストは、「ドナウの真珠」とも呼ばれるヨーロッパで最も美しい都市のひとつで、世界中から多くの観光客が訪れている。

そのブダペストを流れるドナウ川にかかる大きな橋のたもとに、中央ヨーロッパ大学（Central European University、以下 CEU）という大学院大学がある。創立から22年と歴史はまだ浅いものの、大学の創設者でもあり出資者でもある投資家ジョージ・ソロスの名前とともに、ヨーロッパでは比較的名の知られている私立の研究機関である。CEUは、かつてソヴィエト連邦の影響下にあった国々の民主化に伴う、同地域のリーダー・研

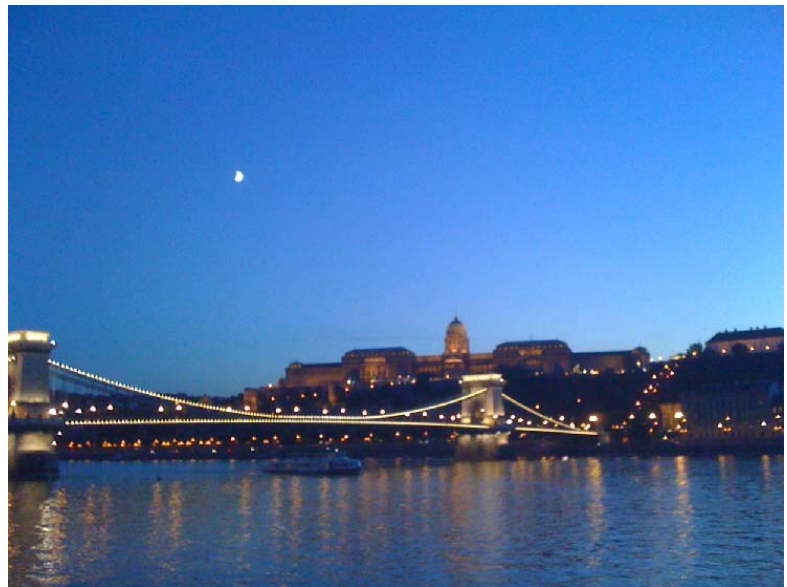


写真1：ドナウ河の景色

究者の育成という目的のもと創立された。そのため、中欧・東欧・中央アジアなどと呼ばれる地域を対象とした人文・社会科学の分野に特化し成果を上げている。

冷戦時代のポーランドとチェコの文化史・制度史を専門とする自分にとって、CEUはまさにうってつけの大学だ。今回、JASSO 長期海外派遣奨学金に応募したとき、私はポーランドで修士課程に在籍していた。日本の国際基督教大学（ICU）を卒業したのち、自分の興味がある地域のことを研究するためには、現地の大学に入学したほうが良いのではないかと考え、ポーランドの大学に進学した。そして、博士課程進学を決意した頃、たまたまCEUのことを知人から聞き知る機会があり、自分でホームページなどを調べるうちに、ぜひこの大学で研究したいと思うようになった。

当初、私は奨学金応募の段階で日本の大学を既に卒業していたため、母校であるICUの大学院事務局に連絡を取り、応募が可能かどうかを問い合わせた。応募ができることが分かった後は、すぐに、必要な書類を準備して国際郵便で取りまとめ先である母校宛に送付した。現在は個人応募もできるようだが、日本での所属がないという人も

まずは母校や JASSO の担当者に連絡してみると良いかもしれない。個人的には、母校の先生や事務局の人が連絡を仲介してくれているということから得られるサポートにも非常に感謝しているので、事前に相談することを奨めたいと思う。二次審査で面接を受ける場合のことを考えて、なるべく予定を確認して試験や学会などと重ならないようにするなど、海外からの応募の場合は気をつけなければならないことも多い。予め募集要項をよく読んで分からないことはすぐに確認するようにした。

アメリカやイギリスの大学では、10月から2月にかけて出願期間が続き、合格の通知をもらうまで2、3ヶ月程度の時間がかかるのが通例だ。CEU でも締め切りが1月に設けられ、合否結果の連絡は3月という予定だった。そこで、応募時点で担当教員とのやりとりしかなかった私は、少しでも早く合格通知をもらえるように早期審査(early admission と呼ばれる制度)を利用し、入学許可の証明書を早めに発行してもらった。早期審査の制度を設けている大学や、奨学金応募の事情を説明すれば別の証明書を出してくれる大学もあるということを知っておくと、応募の際に書類の不備などで困ることは減ると思われる。



写真2：ハンガリー科学アカデミーで行われた入学式

CEU は少し特殊な大学である。まず、CEU はアメリカの高等教育機関として認可を受けている。つまり、大学自体はアメリカの大学だと言える。しかし米国に本校があるわけではなく、キャンパスはブダペストにしかない。また、ハンガリー政府からも高等教育機関としての認可を受けている。このことから、所定の条件を満たせば米国とハンガリー（を含む欧州連合）の双方から正式な学位を取得することができるのである。アメリカの大学なので、授業や学位論文の執筆は全て英語で行われるというのも特徴のひとつである。ハンガリーやルーマニア、そしてクロアチアといった近隣の国々からの学生が多いが、アジアや北米出身の学生も決して少なくはない。こういった大学で一日の大半を過ごしていると、自分がハンガリーにいるということさえ忘れてしまいそうになる。

博士課程のプログラム

私が現在所属しているのは、CEU の歴史学部 (Department of History) である。比較歴史学の博士課程プログラムが開講されており、私の学年では8人の学生が、そして博士課程全体ではおよそ50人が、在籍している。プログラムの基本的なコースは、1年目に授業とコースワークを、2年目に個人でのリサーチを、そして3年目に指導補助 (Teaching Assistant) という流れがモジュールとして提示されており、いくつ

かの授業をまとめて1年目に取らなければならない。CEUは三学期制で、最初の二学期分（それぞれ9-12月、1-3月）が授業をとる期間、そして最後の三学期目は各自の試験勉強やリサーチ期間として自由に時間を使うことが許されている。

米国の大学では、一年次の終わりに行われる修了試験（Comprehensive Exam）に向けた勉強に取り組まなければならない。昨年は授業のかたわら、この試験に向けた勉強で忙しく過ごしていた。これは、二年次以降のリサーチに必要な専門知識の確認を行うもので、指導教官・副査の他、外部の専門家を招いて行う口述試験である。50冊程度の本と50本程度の論文を指導教官と共にあらかじめ選択し、その内容をもとに、博士論文の計画書について議論をする。試験では、二次文献について正確に理解し、専門家として議論する力について評定される。この試験を6月に行ったあとは、晴れてPhD studentではなくPhD candidateとして博士論文を執筆する資格が与えられる。ひとまずこの試験が終わるまでは自分の研究を始めることはできない。

試験準備の中で一番大変だったことは、文献を選んでいく作業だった。これまで自分が読んだもので重要なものがあればリストに加えても良いとのことだったが、最重要文献以外はなるべくこれまで読んだことのないものを選ぶようにした。探しているうちにあれもこれも加えたいと考えつつ、実際に読む分量を考えると削らなければならない。二次文献の性質（著者の傾向、出版社のカラー、出版された年代による違い）についても以前よりもっと細かく考えるようになった。試験本番は非常に緊張してしまい、上手く答えられない場面もあったが、試験の議論で多くのことを学んだという実感もある。

授業は、毎回3、4本の論文を読んで準備をし、それぞれが持ち回りでプレゼンテーションをし、残りの時間討議するというタイプのものが殆どであった。一年次は博士課程の必修科目以外に、修士課程の学生が参加するコースや他学部との共同開講の授業にも参加した。これは知り合いを増やす良いきっかけにもなった。それなりに学生の数がいるとは言え、歴史学部ではリサーチなどでブダペストにいない人も多い。また、CEUでは修士課程からそのまま博士課程に上がるという人が比較的多いため、博士課程の友人たちの多くはみな既に大学の環境や制度に慣れ親しんでいる。全くの外部から来た私のような学生は戸惑うこともあったのだが、入学時期が一緒だった修士課程の学生たちと悩みを共有することができたためあまり不安を感じることはなかったように思う。

研究とアーカイブ

上述したように、一年次は自分の専門の研究よりも課題や授業準備に追われていたが、この夏からは大学のすぐ近くにあるオープン・ソサイエティ・アーカイブ（OSA Archive）で史料の収集を開始した。この史料館は、ジョージ・ソロスの設立したオープン・ソサイエティ・ファンド（OSF）という基金に支えられて、冷戦時代の諜報機関やラジオ局（Radio Free Europe）が残した史料、ソ連圏の国々で発行された地下出版などを収集している。上記のファンドはCEUの設立母体でもあり、大学とアーカイブには深いつながりがある。

今年の5月には、館長でもある副査の先生の授業を受講した学生らと、史料館での

展示企画に参加した。展示会は『未来の図書館』という表題で、再来年度から建設が始まる CEU の新図書館の計画について紹介したものだ。

現在も、その先生が企画しているプロジェクトに参加し、冷戦時代の社会科学の発展について調査をしている。歴史研究においては一次史料にあたるのが肝要だと言われるが、実際にアーカイブを利用するだけでなく、その活動に関わることで史料との向き合い方についても理解を深めることができる。例えば、史料のスクリーニングや分類・整理の方法といった細かい作業を通じて、思いがけない発見をすることもできる。



写真3:オープン・ソサイエティ・アーカイブでの展示会の様子

特に、私が研究している現代史のような分野においては、かなりの量の史料が比較的良好な状態で残されているため膨大な情報の中から必要なものを取捨選択する力が要求される。インターネットを通じてオンラインで公開されているものも年々増えてきた。また、民主化して以降の中央ヨーロッパでは、かつての共産党政権時代の史料を公開したり、人々の記憶や証言を記録・保存したりするために、多くのアーカイブや博物館が設立されている。こうした状況の中、OSA Archive は、単なる史料館としての役割のみではなく、史料のありかたそのものを考察し直し、アーカイブの役割を発信していくこともその目標に掲げている。時代の変化とともに移り変わってきた史料と史料館の関係について、理論を学びながら実践の場に携わることができるのは歴史研究者としてとても良い経験になるだろう。

英語で研究すること

少し話が逸れるが、英語で研究することについて、現在の学問状況に触れつつ考えたことを書いてみたい。私の専門がポーランド・チェコの歴史だという話をすると、よく、「どうしてハンガリーに留学しているのですか」と尋ねられることがある。初対面の人に事情を説明するときはどうしても一言では答えにくい。ハンガリーにあって、でもアメリカの大学で、名前は中央ヨーロッパ大学で…となると、とてもややこしく聞こえてしまうのも仕方がないことではある。だがそれよりも、「どうしてポーランドとチェコのことをやるのに、その国に行かないのか」あるいは「どうしてそういった国々のことを学ぶのに、英語を主言語とする大学を選んだのか」ということには少しばかり説明が必要になると思う。

もちろん、ポーランドやチェコの歴史を学ぶ上で、それぞれの国の研究者が書いたものや各国内の最新研究動向については常に目を光らせておかなければならないだろ

う。しかし、フランスやドイツ、ロシアといった関心を集めやすい国々と違い、ヨーロッパの（相対的）東側に位置する地域の歴史については、外国の研究機関による成果というものを全く無視することができないという事情がある。理由はいくつか挙げられる。例えば、多くの研究者が二度に渡る大戦や共産主義政権からの弾圧を理由に、各地（主にアメリカ）に亡命したこともそのひとつだ。また、冷戦時代の世界情勢も関係している。一方のアメリカやイギリスでは、敵国であった東欧圏をはじめとする国々について本格的な研究機関を作るなど情報収集に徹底し、他方の共産主義国家においては自国の歴史についての研究が政治的な理由から制限されることさえあった。こういった背景から、近年ではアメリカやイギリスなどで広がったスラヴ研究(Slavic Studies、あるいは Russian Studies、Eastern European Studies などとも呼ばれる)が、翻って各国々での研究にも影響を与えているのである。

また、これらの地域の歴史は、相対的に話者数の少ないローカルの言語で書かれると、どうしても読者が限定されてしまう。多くの研究者に読んでもらうためにも、なるべく英語・仏語・独語といった言語で書くことが分野の裾野を広げていくうえでも重要なように思われる。私はハンガリー語が読めるほどの知識は持っていないため、ポーランドやチェコと同じソ連の衛星国であった社会主義時代のハンガリーの歴史について書かれた英語の専門書があればとてもありがたいと感じる。これは他の分野のひとつにとっても同じではないだろうか。

もちろん、猫も杓子も英語にするべきだという主張に賛同するつもりはない。日本でも、多くの専門書が日本語に翻訳されており、そういった翻訳の労苦に対してはどれほど敬意が払われても足りないと思う。しかし、学術の成果をなるべく多くの人に届けるといふ努力も同時に必要だ。自分の成果がよりたくさんの方の専門家の目に触れることで、改善点について様々な意見を得ることが初めて可能になる。自分が研究している対象やその研究者の層を考えると、なおさらこのことの重要性を感じる。「英語で書かなければ評価されないから」英語で書くのではなく、視野を広げて伝える努力をすることで、自分が研究している分野についての見識や理解が深まれば良いのではないだろうか。私が日本語ではなく英語で博士論文を書きたいと思い CEU を選んだ理由も、こういった考えがあつてのことだ。時に英語の覇権主義ということ語りアカデミックな世界での英語の隆盛に懸念を示す人もいるが、より柔軟な姿勢でコミュニティに向き合っていくことも大切なはずだ。

現状とこれからの課題

中央ヨーロッパ大学の博士課程に在籍してからおよそ14ヶ月が過ぎた。これまでのところ、自分の成果への満足度はあまり高くない。新しい環境に慣れるのに少し時間がかかったのもあるが、何よりこれまで知らなかったことをたくさん学んだため、自分の計画や考えの不十分さをどのように修正していくか苦心している。コースワークを中心に過ごした1年を終え、年明け以降はプラハやワルシャワといった街にしばしば出向いて本格的なリサーチ期間に入る予定だ。これまでの時間を振り返ると、時間が経つのがあまりにも早く驚きを隠せないが、残りの留學生活で博士論文をしっかりと書くことができるよう、一日一日を大切にしたいと思う。歴史研究は、どこまでや

ってもやりつくすことがない広大な領域だ。人間の過去の営みに対して、自分と異なる文化や言語に対して、想像力を働かせ、それをひとつの連続性として描き出さねばならない。そしてそのような力は、小さな努力の積み重ねを通じてのみ得られるものだ。今回、体験記を書く機会を頂いたことで、これまでの留学を振り返ることができた。この反省を忘れず、日々目標に向けて、少しずつ前進していきたい。